はじめに

さあ，法哲学を始めよう。でも，どうやって？

■ いきなり実戦アプローチ

法哲学は，正義にかなった社会制度を探求する学問である。

法哲学への従来のアプローチでは，基礎概念の歴史的な背景や伝統的な議論から始めて，正義とは何か，正義は自由や平等といかなる関係にあるか，不正な法制度はありうるか，といった抽象的な問題を検討する。うまくいけば，法哲学に関する広く深い知見が得られるが，とっつきにくく途中で挫折してしまうことも少なくない。

本書は，それとは異なるアプローチを採用する。本書が採用するのは，「いきなり実戦アプローチ」である。いきなり実戦アプローチが重視するのは，基礎練習ではなく実戦練習である。正義や自由・平等をそれ自体として問うのではなく，より具体的で論争的な問題にいきなり取り組む。それを通じて，法哲学の概念や思考法をいわば体で覚えていく。

例えば，「ワクチン接種を義務化すべきか？」という問題に，いきなり取り組む。それを通じて，ワクチンのリスクとメリットをどのように比較衡量すればよいか，義務化するとはどのようなことでありそれ以外の方法と何が違うか，を事例に則して考えていく。具体的な問題から出発することで，逆に，抽象的な基礎概念について明確なイメージをつかむことができるようになる。

しかも，「いきなり実戦アプローチ」は応用力にも優れている。例えば，「男性の育児休業取得を義務化すべきか？」という問題に取り組むときに，ワクチン接種の義務化を参照すれば，義務化の代替案を考える手がかりが得られる。あるいは，「カジノを推進すべきか？」という問題に取り組むときに，ギャンブル依存症のリスクとワクチン接種のリスクを比較して，社会の利益のために個人を犠牲にしてよいかという論点を立ててみてもよい。具体的な問題から出発することは，関連する問題への応用力を鍛えることにもつながっている。

■ もっと問いかける

本書は，2016年に刊行した『問いかける法哲学』の続編である。『問いかける法哲学』は法哲学の演習書であり副読本であり入門書である。その新機軸は「いきなり実戦アプローチ」にあった。幸いにも多くの読者を獲得することができたため，こうして続編が刊行されるに至った。

続編となる本書では，問いを完全に一新している。問いの選定基準は，具体的であること，論争的であること，今日的であること，規範に関わること，そして重要な理論的課題に関わることである。こうした選定基準を満たす数多くの問いから，その相互関係をも考慮しつつ，全体のバランスを考えて選定したのが，本書が掲げる15の問いである。

15の問いは，自由，平等，法と秩序という３つの大きなテーマに区分することができる。各章のキーワードを３つずつ挙げれば，以下のようになる。

第Ⅰ部「自由」

01 ワクチン義務化 → 義務化，リスク，個人と社会
02 カジノ → 賭博の自由，依存症，経済効果
03 セックス・ワーカー → 自己決定，性道徳，フェミニズム
04 遺伝子操作 → 自律，技術，エンハンスメント
05 奴隷契約 → 自己所有権，契約の自由，パターナリズム

第Ⅱ部「平等」

06 男性育休の義務化 → ジェンダー，ケア，ライフスタイル
07 ベーシック・インカム → 経済的平等，実現可能性，フリーライダー
08 男女別トイレ → マイノリティ，多様性，差別
09 ヘイト・スピーチ → 表現の自由，尊厳，法規制
10 子ども投票権 → デモクラシー，子ども，権利

第Ⅲ部「法と秩序」

11 死刑制度 → 刑罰の正当化，処罰感情，可謬性
12 移民の自由化 → 外国人，国境，人権
13 フェイク・ニュース → 情報，思想の自由市場，プラットフォーム
14 捕鯨 → 動物，多文化主義，先住民族の権利
15 AI裁判官 → 法的判断，裁判の正統性，誤判

ここに見られるように，テーマの括りは緩やかであり，テーマを超えて関連している項目も少なくない。各トピックを有機的に関連づけることができれば，いつの間にか，法哲学に関する広く深い知見を手にしていることだろう。

■ 問いかけられている読者

本書が想定する読者は，基本的には，大学の学部学生や法科大学院の学生である。だがそれに加えて，法哲学の入門書を目指して簡潔・明快に書かれているので，意欲的な高校生にも十分読みこなすことができるはずである。

もちろん，各章の問いに関心のある幅広い方々にも，興味深く読んでいただけるだろう。さらに，最新のトピックが扱われていることもあり，プロの研究者にもお楽しみいただけるポイントが随所にちりばめられている。

本書は，どの章からでも読み始めることができるようになっている。気になる章から始めて，関連しそうな章を読み進めていけば，得られるものも多いだろう。例えば，ヘイト・スピーチとフェイク・ニュース，奴隷契約と移民の自由化のつながりは，それ自体として興味深いトピックである。

各章の問いをさらに掘り下げて考えるために，本書ではいくつかの工夫を施している。各章末には **ブックガイド**を置いて，次に読むのをお勧めできる文献を紹介している。また，発展的な内容を含む注もつけられているし，各章を執筆する際に参照した文献のリストも掲げている。

本書は，通常の入門書とは異なり，執筆者がときとして中立的な立場を取らず，自説を展開している。各章の執筆者を自分に問いかけてくる論争相手に見立てて，意見を練り上げてもらえれば，本書の目的は達成されたことになる。

最後になりますが，コロナ禍とほぼ同時にスタートした本書の企画段階でご尽力いただいた法律文化社の梶原有美子氏，本書の編集段階で梶原氏に代わり，各原稿に対してコメントをつけていただくなど丁寧かつ円滑に作業を進めていただいた法律文化社の舟木和久氏には，心よりお礼を申し上げます。

2024年 2 月

瀧 川 裕 英